ケインズ全集

第7巻

雇用・利子および貨幣の一般理論

塩野谷祐一 訳

東洋経済新報社

雇用・利子および貨幣の一般理論(ケインズ全集第7巻)　**定価 4500 円**

昭和58年12月8日 発行

訳　者　塩野谷祐一
発行者　高柳　弘

発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
郵便番号 103　電話03(270)4111(大代表)　振替口座東京3-6518

〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします.　3333-9457-5214
Printed in Japan

『ケインズ全集』日本語版の序文

経済学はいま二重の意味で、大きな危機にさらされている。一つは世界経済そのものがかつてない大規模の不況の中におちこんでいることである。これは必ずしもそのまま経済学の責任とはいえないかも知れない。しかし世界の各国がいままでの経済学の、あらゆる知識を動員して実行している政策が、スタグフレーションからの脱却という点では、いずれも思うように成功していないということは、やがて経済学への不信となることは否定できない。いま一つは、成長の代償としての環境の破壊や、資源の不足からくるコストの増加や、いままでの経済学の固有の領域をこえる問題が登場して、経済学そのものの改造が要求されていることである。成長の結果が、成長への疑問をひきおこすということになれば、そこから経済学の危機がさけばれるのも、やむを得ないであろう。

経済学をめぐるこのような危機意識が、これからの経済学にどのような影響を与えていくかは、将来の問題である。ただここでいいたいことは、この危機意識の、どれもが深くケインズと結びついていることである。

まず、政策面から考えてみよう。ある人々は、世界経済が直面する失業とインフレーションは、まさにケインズの提唱した完全雇用政策の結果であると主張する。ケインズの所得決定論は、マクロでみた投資と貯蓄の均衡が、必ずしも完全雇用を保証しないことを証明する。そこから不況に際して失業を防ぐためには適切な財政・金融政策によって需要を造出することが必要となる。戦後の各国はみなこの政策をとって完全雇用を実現した。しかし、実際にはそ

れはインフレーションを伴い、その結果が、今日のスタグフレーションになっていると批判するのである。

政策の面からみて、ケインズの経済学が三〇年代以降の不況克服と繁栄に貢献したことは明白である。かりにいま批判されているように、現在のスタグフレーションがその結果であるとしても、これからの脱出には、まずケインズに遡って考えることが必要であろう。その上に、ケインズの経済学は、こうした政策面でだけとらえられてはならぬという面をもっている。それは古典学派の経済学が、その自由貿易政策によっては完全にとらえられないのと同様である。その発見は自由貿易主義が世界を風靡した一〇〇年の後に行なわれたものであった。ケインズの場合にも、正しい理論と政策の評価は恐らくずっと先のことであろう。そうだとしても現在の問題が、何よりもまずケインズとつながることは明白である。

経済学そのものの危機意識についてもまた同様である。環境の破壊や、資源の有限性や、その意識の底には確かにケインズ経済学の視野の中になかった問題を含んでいる。しかし、こうした問題を、特に現代の問題として登場させた原因が、外ならぬ経済成長にあったとすれば、それは決してケインズと無縁ではない。ハロッドを起点として展開された成長論は、もちろんケインズにつながるものであった。その上に、ここに指摘されている公害やコストの新しい問題に接近する方法は、ケインズから新古典派総合にいたるマクロ分析の発展に負うものである。この方法に依存することなしに、経済学の新しい分野への拡充は期待することができないであろう。

総じて危機意識の先に予想される経済学への途には二つの方向が考えられる。一つはケインズによって強調された政策化への途を、さらに一歩おし進めて、市場経済に対する公権の介入を是認し、経済の全体としての計画化に行こうとする方向がその一つ。ケインズがマーシャルからうけついで、全く手をつけないままに残してきた市場経済原則を、改めて問題として取り上げようとする方向が、その二つである。周知のように新古典派総合は、この二つの方向

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を完全雇用を境にして別々に認めようとした。完全雇用に達するまではケインズの政策で、それ以後は市場原則でというのが彼らの主張する政策論の骨格であった。しかし、そうした総合が、理論的にも政策的にも不完全なものだということは明白である。現在の経済学に対する危機意識は、すでにはるかにこの段階を越えているといってよい。市場経済の地位をどのように認めるべきか、それは今ではケインズの時代よりは、はるかに大きな問題となってはいるが、依然としてここにもケインズを始発点とする問題がある。

現代の、あらゆる問題がすべてケインズから出ているというのは、もちろん言いすぎである。誇張していえば、それはすべての問題がアダム・スミスにあるというのと、あまり違わないであろう。しかし、ケインズが出てきてから、正確にいえば一九三六年の『一般理論』によって、それが「新しい経済学」として認められてから、一九七六年の今日まで、完全雇用といい、経済成長といい、世界通貨といい、あまりにも多くの経済的変化が、ケインズの名と結びついている。『一般理論』から今日までの四〇年間に世界に起こった経済的変化は、一国的にはそれぞれの特殊の説明要因があっても、総体としてはケインズ的世界の中のことであった。それが行きづまってスタグフレーションになっているとしても、それから脱却するためには、改めてケインズに遡って考える必要があるというのも、この意味では、決して言いすぎではないだろう。

ケインズ経済学が新しい経済学として認められた背景は三〇年代の世界恐慌であった。そこで経験されたような不況と失業とを救済するものとして、ケインズ理論は大きな役割を果たした。背景としての事情はいま大いに異なる。三〇年代の不況は物価のデフレーションを特色としたが、七〇年代の不況はインフレーションのただ中に起こっている。経済に対する見方にも大きな変化がある。かつては例外とされた市場経済への介入は、いまでは当然のことのようにその幅を拡大した。しかし、事情や政策意識のあらゆる変化にもかかわらず、三〇年代と七〇年代との間には何

か共通のものがある。三〇年代のケインズに対して、七〇年代にそれこそ新しいケインズを待望する声のあるのも理由なしとしない。ただ新しいケインズは、古いケインズと無関係にはでてこない。これがいま、われわれのいいたいことである。

三〇年代の世界が経済学にとって一つの転機だったとしたら、七〇年代のそれも、同じように一つの転機であろう。転機として注目される要因や現象はいたるところにある。その本質的なものをとらえて、いま一度新しい経済学の体系を編み出すのは、これからの経済学者の仕事である。ケインズはケインジアンを生み出し、やがて、新古典派総合となり、いまでは再びケインズに帰れという動きをさえ生み出している。そうした変化の先に、第二のケインズを想定することは決して夢ではない。しかし、かりに第二第三のケインズが生まれたとしても、元のケインズが死ぬわけではない。われわれのもつ経済世界のイメージがかくも深くケインズの名と結びついている限り、その経済学は、これを読む者に常に新しい力を与えつづけるであろう。うけとる人によってその意味を異にしながら、したがってたえず批判をあびつつ生きつづけていく、それはまさに古典と呼ぶにふさわしい存在である。

この全集は、巻頭の序文にあるように、イギリスの王立経済学会が、この学会につくしたケインズの功績をたたえて刊行されたものである。したがって、そこにはケインズに対する何の評価も出ていない。しかし、それを日本で出版するに当たって、同じようにするわけにはいかない。できれば世界の経済および経済学に与えた影響、別しては日本の経済および経済学に与えた影響について何らかの叙述がほしいし、さらに望めば、その評価がほしい。しかし、それは、ここで企てるべくあまりに大きな仕事であるし、評価にいたってはまだその時ではない。その上に、この全集には、狭い意味での経済学をこえた、人間としてのケインズを知るべき幾多の資料がある。少なくとも原文によるこの全集の完結するまでは、そしてこの邦訳による全集が完結するまでは、刊行される一巻一巻を味読されるよう願

うほかはない。

この邦訳全集の刊行に当たっては、翻訳者の選択、監閲者の選択に最大の注意を払った。ケインズ研究家として名を知られているこれらの学者が、われわれの企画のために、この自己犠牲的な仕事を快く引き受けていただいたことに対しては、編集者として感謝の外はない。日本でのケインズ全集出版社として承認された東洋経済新報社が、万難を排してこの企画を敢行されたことも、われわれの欣快とするところである。

昭和五一年七月

編集委員代表　中山伊知郎

凡　例

一、原典ページは下部欄外に示した。

一、原典の本文は9ポイントで、小活字のものは8ポイントで組んだ。

一、原典におけるイタリックの個所には原則として黒丸の傍点・・・を付した。ただし、書名、雑誌名、新聞名の場合のイタリックは『　』で示し、題名、ラテン語、フランス語など外国語を示すにとどまるイタリックには傍点を付していない。

一、人名、地名などの固有名詞、その他習慣的に大文字で始まる語句を除き、原典に出てくる大文字には白丸の傍点○○○を付した。

一、原典における注番号は（　）の中に示し、その注は本文の段落のあとに6号活字で組んだ。注番号は本文の段落ごとの通し番号とし、原典の注番号と必ずしも一致しない。注のページも必ずしも原典のページとは一致しない。訳者注の個所は〔訳者注〕によって示し、注を巻末にまとめた。ただし、訳文の理解のために訳者が補った短い語句は〔　〕によって本文中に挿入した。「　」は原典において全集編集者によって用いられたものである。

一、引用符は「　」で示した。ただし、引用符の中の二重引用符は『　』で示した。

一、本書の中で本書のページに対する参照がなされる場合には、特に断わらないかぎり、邦訳書のページによる。

一、『ケインズ全集』の他巻に対する参照は原典のページによる。

一、外国の人名、地名などの固有名詞は、わが国の慣例の表記法に従っている。

一、Sir および Lord については、前者は片仮名でサーと表記し、後者は卿と訳した。

一、術語としてすでに定着をみている慣用の訳語はそのまま踏襲した。ただし、employee は国民所得統計や労働統計において次第に「雇用者」と訳されるようになっているのでそれに従い、employer を「使用者」と訳した。また current は一般に「経常」と訳されているが、原語の意味に合わないので、「現行」「現在」「今期」「当期」「当座」などの訳語を当てた。

一、「全巻の序文」は原典の刊行が進むにつれて、公刊予定巻数が増えたことや、各巻の内容などに応じて、巻によって差異がある。邦訳では、各巻ごとに、原典所収の「全巻の序文」を訳出した。

一、本巻の原典には、原典第一版のミスプリントの正誤表が付録一として収められているが、本訳書ではこれを省略した。したがって原典の付録二および三を、それぞれ付録一および二と呼んでいる。

一、表については、原典における組み方を変えたものがある。

一、本巻の監閲者は高橋泰蔵、安井琢磨である。

全巻の序文

この新標準版の『ジョン・メイナード・ケインズ全集』は、王立経済学会が彼を記念して世に送るものである。彼はその多忙な生涯のきわめて大きな部分を、この学会のために捧げた。一九一一年、二八歳のとき、彼はエッジワース（Edgeworth）に続いて『エコノミック・ジャーナル』の編集者となり、二年後には同学会の幹事にもなった。彼は生涯のほとんど最後まで引き続きこれらの職務に従事した。たしかに、エッジワースは復帰して、一九一九年から二五年までふたたび編集者の地位で彼を助けたし、ついでマグレガー（MacGregor）が一九三四年までエッジワースの代わりを務め、同年からオースティン・ロビンソン（Austin Robinson）がマグレガーの後任として、一九四五年まで引き続いてケインズを援助した。しかし、これらの全年月を通じて、一九三七年彼が重病であったときの一、二号の発行を除けば、ケインズはまったく中断なしに、『エコノミック・ジャーナル』に発表される論文についてみずから主要な責任を負い、重要な決定を行ったのである。彼が同学会の会長に選ばれ、編集者の職をロイ・ハロッド（Roy Harrod）に、幹事の職をオースティン・ロビンソンに譲ったのは、一九四六年復活祭の彼の死のわずか数カ月前であった。

編集者と幹事の二つの資格で、ケインズは王立経済学会の政策を形成するのに大きな役割を果たした。学会のいくつかの大きな出版活動――一九三〇年代における多くの初期の出版物のほかに、リカードウ（Ricardo）全集のスラ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ッファ（Sraffa）版、ベンサム（Bentham）経済著作集のスターク（Stark）版、およびマーシャル（Marshall）のギルボー（Guillebaud）版――が企画されるについては、ケインズに負うところがきわめて大きかった。

したがって、ケインズが一九四六年に逝去したとき、王立経済学会が彼を記念したいと思ったのは当然のことであった。そして学会がケインズ全集の出版によって彼を記念することを選んだのは、おそらく同様に当然のことであった。ケインズ自身、常に立派な出版には喜びをもっていた。そこで学会は、出版社としてマクミラン社、印刷社としてケンブリッジ大学出版局の援助をえて、ケインズの全集をまったく彼にふさわしい永久的な形にしたいと熱望してきた。

この『ケインズ全集』版は、経済学の分野における彼の著作を可能なかぎり多く収めて出版するであろう。ただし、彼の私的かつ個人的な書簡はいっさい含めないし、また彼の家族が所有している書簡も発表しないであろう。すなわち、この版は経済学者としてのケインズを取り扱うのである。

ケインズの著作は、大まかにいえば五つの種類のものに分たれる。第一は、彼が執筆し書物として出版した著作である。第二は、生存中に彼自身が作成した論文およびパンフレットの論文集である（『説得論集』と『人物評伝』）。第三に、出版されてはいるが論文集に収集されていない非常に大量の著作――新聞に書いた論文、新聞への書簡、彼の二巻の論文集には収録されなかった雑誌論文と種々のパンフレット――がある。第四に、これまで未出版の少数の著作がある。第五に、経済学者との間の書簡および経済学または公務に関する書簡がある。

この全集は、経済学者としてのケインズの重要な著作の完全な記録を出版することを企図している。上記の最初の四つの種類のものについては、ほぼ完全にそのすべてを出版するつもりである。唯一の例外は、ケインズが異なった新聞や異なった国で発表するためにほぼ同じ題材について書いた若干の論文であって、これらは大して重要でない相

違を含むにすぎない。このような場合には、この全集は最も興味のあるものを選択して、類似のもののなかから一つだけを出版することにする。

ケインズの経済書簡については、選択的なものになるのは避けがたい。タイプライターとファイル・キャビネットの時代において、とくにかくも活動的で多忙だった人物の場合には、若干の重要でない、時事的な問題について彼が口述したはずのすべての文書の小片までを出版することはとうてい不可能である。それにもかかわらず、われわれは、ケインズが同僚の経済学者との議論のなかで、彼自身の見解を展開した手紙は、ケインズが公職についていた時代のよりいっそう重要な手紙と同様、できるだけ多く収集し出版するつもりである。

出版された書物は別として、この全集を準備するものにとって利用しうる主要な資料源は二つあった。第一に、ケインズは遺言で、リチャード・カーン（Richard Kahn）を遺言執行人とし、経済問題に関する文書の責任者にしていた。これらの文書は、ケンブリッジ大学のマーシャル図書館に所蔵されており、この全集に利用することができた。一九一四年までケインズは秘書を持たず、彼の最も初期の文書は、主として彼が手書きによって執筆し、保管してきた重要な手紙の草稿のみに限られている。その時期については、われわれが所有している手紙の大部分は、彼が書いた手紙よりもむしろ彼が受け取った手紙によって占められている。一九一四―一八年および一九四〇―四六年の時期に、ケインズは大蔵省に勤務した。当時彼が執筆した文書の多くは、公的記録の公開によって利用可能となった。一九一九年以降生涯の終りまで、ケインズは秘書――長年の間スティーヴンズ（Stevens）夫人――の援助を得た。したがって、彼の活動した生涯の最後の二五年間については、われわれはたいていの場合、彼の受け取った手紙の原文のほかに、彼自身の手紙の写しを持っているのである。

もちろん、この時期にも、彼が自分で手書きによって書く場合があった。これらの若干の場合には、手紙の送り先

の協力をえて、いくつかの重要な往復書簡の全部を収集することができた。そして、われわれは手紙のやりとりをした両者に公平に、両方の手紙が全部出版されるように配慮した。

第二の主要な情報源は、ケインズの母堂フローレンス・ケインズ（Florence Keynes）、すなわちネヴィル・ケインズ（Neville Keynes）の夫人によって、非常に長い年月にわたって保管されてきた一群の切抜き帳であった。一九一九年以降これらの切抜き帳には、メイナード・ケインズのかなり時事的な執筆物、新聞への投稿のほとんど全部、および彼が執筆したものばかりでなく、彼の執筆物に対する他の人々の反応を知ることのできる多くの資料が入っている。これらのきわめて注意深く保管された切抜き帳なくしては、ケインズのいかなる編集者や伝記作者の仕事も、はるかに困難なものになっていたことであろう。

この全集の計画は、現在企画されているところでは、次のとおりである。それは、全二五巻〔その後三〇巻に変更〕となる予定である。これらのうち最初の八巻は、一九一三年の『インドの通貨と金融』から一九三六年の『一般理論』までのケインズの既刊の書物であり、『確率論』を含む。次に、第九巻と第一〇巻として、『説得論集』と『人物評伝』とが続くが、これらはケインズ自身の手になる論文集である。『説得論集』は最初の版と二つの点で異なる。その一つは、初版のなかに入れられていた論文とパンフレットの完全な原文を掲載し、（初版のときのように）短縮した形のものとはしないことであり、もう一つは、ケインズが当初の論文集に入れたものとまったく同じ性格をもつ、一、二の後期の論文を追加することである。『人物評伝』の場合には、ケインズが一九三三年以後に執筆した一、二の他の伝記論文を追加する

それに続くのは、第一一巻から第一四巻までの経済論文と書簡の四巻、ならびに社会・政治および文学的著作の一巻である〔現在これに相当するのは第一一―一四巻、第二八巻、第二九巻である〕。われわれはこれらの巻のなかに、

ケインズの経済書簡のうち、これらの巻に印刷されている論文と非常に関連のあるものを含めることにする。

われわれが現在予定している後続の九巻〔その後一三巻に変更〕は、一九〇五年の彼の公的生活の開始から逝去にいたるまでのケインズの『諸活動』を取り扱う。この資料は時期別に分割する計画であるが、それぞれの巻には、これまですべて未収集のかなり時事的な著作、これらの活動に関連した彼の書簡、およびケインズの諸活動を理解する上で必要なその他の資料と書簡を発表する。これらの巻は、エリザベス・ジョンソン（Elizabeth Johnson）とドナルド・モグリッジ（Donald Moggridge）によって編集されつつあり、ケインズの諸活動の追跡と解釈を通じて、後世にこの資料が十分理解できるようにするのが彼らの仕事である。この仕事がさらに進捗するまでは、この資料が、今われわれが考えているように、九巻に配分されるか、あるいはさらにもう一巻ないし数巻拡大する必要があるか、正確にいうことは不可能である。最後の巻は文献目録と索引に当てられる。

この全集に責任を負ってきた人々は、次のとおりである。ケインズ卿の遺言執行人であると同時に、ケインズ卿の長年にわたる親密な友人であり、さらにまた、さもなければ誤解されたかもしれない多くの事柄を解釈する上で大きな助けとなったカーン卿。ケインズの伝記作者であるサー・ロイ・ハロッド。『エコノミック・ジャーナル』のケインズの共同編集者であり、また王立経済学会の幹事の後継者であるオースティン・ロビンソン。最初の時期の編集の仕事は、エリザベス・ジョンソンによって行われた。その後、ドナルド・モグリッジが彼女とこの責任を分担した。二人は、それぞれ異なった時期に、ジェーン・シスルスウェイト（Jane Thistlethwaite）、初めケインズの文書のファイルを体系的に整理する任に当たっていたマクドナルド（McDonald）夫人、長年にわたってジョンソン夫人とともにケインズの文書にかかわる仕事をしてきたジュディス・マスターマン（Judith Masterman）、ごく最近はスーザン・ウィルシャー（Susan Wilsher）、マーガレット・バトラー（Margaret Butler）、およびバーバラ・ロウ

(Barbara Lowe) から助力を受けた。

編集者の序文

「私は最近、古典派の立場から私の現在の見解に到達するまでの精神的進歩の因果連鎖とでもいうべきもの――すなわち、問題が私の考えの中で発展してきた順序――に大いに心を奪われています。一部の人々が不必要に論争的な調子とみなしているものは、実は、私がかつて確信していたことがらや、移行の契機となったことがら――それは私にとって個人的には解明の契機となったことがらです――が私自身の心の中できわめて重要な位置を占めていたことに由来するのです。……あなたは有効需要については、もっと正確にいえば全体としての産出物の需要表については、それが乗数の中に暗黙裡に含まれている以外には言及しておられません。私にとって、歴史的にみて最も驚くべきことと思われるのは、全体としての産出物の需要と供給の理論、すなわち雇用の理論が、四分の一世紀の間、経済学において最も多く議論された話題であったにもかかわらず、その後まったく姿を消してしまったということです。『貨幣論』が出版されたのち、私にとって最も重要な変化の一つは、このことに突然気づいたことです。それに気づいたのは、所得が増加するとき、所得と消費との間の差が増大するという心理的法則を私自身が明確に把握してから後のことです。――この法則は私自身の考えにとってはきわめて重要な結論でしたが、このような表現のままでは、他の人々にとってはあまり重要だとは思われませんでした。それからかなり後になって、利子が流動性選好の尺度であるという考えが浮かびましたが、この考えは、それが浮かんだ瞬間に頭の中で非常に明確になりました。そして最

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com